九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 **No.307**

2017（平成29）年10月25日（水）発行

■数多くの3.11大震災慰霊碑の中で、今年3月11日町が建立した浪江町請戸の**大平山霊園の慰霊碑**は特筆されます。■表の面には津波で亡くなった182名の氏名を刻字。裏面の碑文には**「翌12日には東京電力福島第一原発の事故により、捜索や救助を断念せざるをえなかった」**と、原発事故で立入禁止になり、助けられた命も見捨てられた無念さが明確に記録されています。■津波犠牲者182名の内訳は、11日収容81名、捜索再開の4月14日の発見70名、現在も行方不明者が31名もいて、原発事故の罪深さを感じます。○一方でこの**大平山**は、地震直後に請戸小学校の生徒93人、教職員19人がいち早く避難して命を救ってくれた、標高48mのお城山です。

主催：「線量計が鳴る」を上演する南相馬実行委員会（代表 若松丈太郎）
後援：南相馬市・南相馬市教育委員会・南相馬市国際交流協会・朝日座を楽しむ会
はらまち九条の会・まなびあい南相馬・福島民報社・福島民友新聞社

脚本・主演 中村敦夫 朗読劇「線量計が鳴る」

2017年12月2日（土）14時開演（13時30分開場）

○会　場：南相馬市民情報交流センターマルチメディアホール

○入場料：全席自由・前売り券1,500円（当日2,000円）

※余剰金は「3.11甲状腺がん子ども基金」に寄付されます

チケット取扱協力店
・北洋舎クリーニング本店（原町区南町）
・おおうち書店（原町区三島町）・文芸堂書店（原町区桜井町）
・井上薬局（原町区錦町）・Cafeいっぷくや（小高区本町 区役所内）

チケット問合せ
・鹿島区柴田 090-3754-2295
・実行委員会早坂 090-2975-2508　栗村 090-8851-6904

中村敦夫 なかむら・あつお　1940年東京生まれ。小・中学校時代をいわきで過ごす。磐城高校に入学し、半年後都立新宿高校に転校。東京外国語大学を中退し俳優の道へ進み、1972年「木枯らし紋次郎」が空前のブームに。Nキャスターや参議院議員も務め、作家活動も。原発の矛盾や理不尽さ、怒りを、元原発技師に扮してひとり福島弁で語る。

天声人語

福島県の詩人、若松丈太郎さんに「神隠しされた街」の一編がある。〈四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた／サッカーゲームが終わって競技場から立ち去ったのではない／人びとの暮らしがひとつの都市からそっくり消えたのだ〉▼チェルノブイリ原発事故の強制疎開に材を取り、1994年につづった。不幸にも福島で現実になり、住民は近隣のまちへ他の県へと避難した。そして千葉県に避難した人たちが訴訟を起こす。問うたのは「ふるさと喪失」の責任である▼原告の証言集には奪われたものが並ぶ。人と人の結びつき、やりがいのある仕事、作物を育む日々、そして穏やかな暮らしである。「事故さえなければ」の言葉がつらい▼千葉地裁はきのう訴えの一部を認め、東京電力に賠償金の支払いを命じた。原告のうち避難先で亡くなった一人について「生活基盤を全て喪失した」「その無念さは計りしれない」とした。取り戻すことのできない暮らしが、命がある▼「原子力に賛成か反対かだけでなく、政策のあり方を国会で深く議論して欲しい」。原子力規制委員長だった田中俊一さんは退任にあたり、注文をつけた。事故の反省でなく、忘却に基づくかのような政策が続いている。時間を戻せない以上、教訓を未来へつなぐしかないはずなのに▼若松さんの詩にはこんな一節もあった。〈私たちの神隠しはきょうかもしれない／うしろで子どもの声がした気がする〉。日常を破壊した力を何度でも思い起こしたい。

2017・9・23

▲これは2017年9月23日付『朝日新聞』のコラム「天声人語」ですが、南相馬市原町区の詩人**若松丈太郎さん（本会会員）の詩「神隠しされた街」**が紹介されています。

若松さんは50年来、人間は原発を制御できないと疑念をいだき続け、1994年に事故後のチェルノブイリを訪ね、福島県浜通りに事故を重ねあわせてこの詩を書きます。

それから17年後の2011年3月、東京電力福島第一原発でまさかの大事故が起こるべくして起こり、私たちの人生や家族、地域を壊滅し一変させました。事故は今も進行中ですが、原発とは何なのかを考えざるをえません。**<2面>**に**「神隠しされた街」**全文をコピーしました。

No.307

神隠しされた街

若松 丈太郎

四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた
サッカーゲームが終わって競技場から立ち去った
のではない
人びとの暮らしがひとつの都市からそっくり消えたのだ
ラジオで避難警報があって
「三日分の食料を準備してください」
多くの人は三日たてば帰れると思って
ちいさな手提げ袋をもって
なかには仔猫だけをだいた老婆も
入院加療中の病人も
千百台のバスに乗って
四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた
鬼ごっこする子どもたちの歓声が
隣人との垣根ごしのあいさつが
郵便配達夫の自転車のベル音が
ボルシチを煮るにおいが
家々の窓の夜のあかりが
人びとの暮らしが

地図のうえからプリピャチ市が消えた
チェルノブイリ事故発生四〇時間後のことである
千百台のバスに乗って
プリピャチ市民が二時間のあいだにちりぢりに
近隣三村をあわせて四万九千人が消えた
四万九千人といえば
私の住む原町市の人口にひとしい
さらに
原子力発電所中心半径三〇㎞ゾーンは危険地帯とされ
十一日目の五月六日から三日のあいだに九万二千人が
あわせて約十五万人
人びとは一〇〇㎞や一五〇㎞先の農村にちりぢりに消えた
半径三〇㎞ゾーンといえば
東京電力福島原子力発電所を中心に据えると
双葉町　大熊町　富岡町
楢葉町　浪江町　広野町
川内村　都路村　葛尾村
小高町　いわき市北部
そして私の住む原町市がふくまれる
こちらもあわせて約十五万人
私たちが消えるべき先はどこか
私たちはどこに姿を消せばいいのか
事故六年のちに避難命令が出た村さえもある
事故八年のちの旧プリピャチ市に
私たちは入った
亀裂がはいったペーヴメントの
亀裂をひろげて雑草がたけだけしい
ツバメが飛んでいる
ハトが胸をふくらませている
チョウが草花に羽をやすめている
ハエがおちつきなく動いている
蚊柱が回転している
街路樹の葉が風に身をゆだねている
それなのに
人声のしない都市
人の歩いていない都市
四万五千の人びとがかくれんぼしている都市
鬼の私は捜しまわる
幼稚園のホールに投げ捨てられた玩具
台所のこんろにかけられたシチュー鍋
オフィスの机上のひろげたままの書類
ついさっきまで人がいた気配はどこにもあるのに
日がもう暮れる
鬼の私はとぼうに暮れる
友だちがみんな神隠しにあってしまって
私は広場にひとり立ちつくす
デパートもホテルも
文化会館も学校も
集合住宅も
崩れはじめている
すべてはほろびへと向かう

人びとのいのちと
人びとがつくった都市と
ほろびをきそいあう
ストロンチウム九〇　半減期　二七・七年
セシウム一三七　半減期　三〇年
プルトニウム二三九　半減期二四四〇〇年
セシウムの放射線量が八分の一に減るまでに九〇年
致死量八倍のセシウムは九〇年後も生きものを殺しつづける
人は百年後のことに自分の手を下せないということであれば
人がプルトニウムを扱うのは不遜というべきか
捨てられた幼稚園の広場を歩く
雑草に踏み入れる
雑草に付着していた核種が舞いあがったにちがいない
肺は核種のまじった空気をとりこんだにちがいない
神隠しの街は地上にいっそうふえるにちがいない
私たちの神隠しはきょうかもしれない
うしろで子どもの声がした気がする
ふりむいてもだれもいない
なにかが背筋をぞくっと襲う
広場にひとり立ちつくす

・この詩は1994年8月の作品。2011年福島第一原発事故の17年前の詩です。歌手加藤登紀子さんは歌にしてCDに、また2015年倉本聰氏の演劇『ノクターン』はこの詩から着想されたそうです。
＜写真＞は、『ひとのあかし』(清流出版)共著のアーサー・ビナード氏と若松丈太郎氏。